



芦生集落まるごと資源調査

調査報告書



2018年1月

特定非営利法人 芦生自然学校

もくじ

1 はじめに	… 2
2 調査の概要	… 3
3 調査結果	… 4
3.1 たずねる①（芦生来訪者 質問紙調査）	
3.2 たずねる②（集落住民 聞き取り調査）	
3.3 くらべる（同様地域との比較調査）	
4 調査から見えたこと	…17
4.1 たずねる①及び②を通じて	
4.2 くらべる を通じて	
4.3 アドバイザーからのコメント	
4.4 担当スタッフの感想	
5 今後の展望	…21

編集後記

1. はじめに

この度、トヨタ財団 2016 年度国内助成プログラム「しらべる助成」を受け実施してきた「芦生集落まるごと資源調査」を報告書としてまとめることができました。ご支援・ご協力くださった皆様に御礼申し上げます。

芦生自然学校は 2004 年の設立以降、主に青少年を対象とした自然体験事業を行ってきました。そして 2015 年に、これまでの 10 年間の活動を振り返りミッションや活動のあり方を検討しました。その結果、これまでの活動に加え、豊かな自然を守り活かした芦生の人々の暮らしと、それを支える自然環境保全を主軸とした、価値創造と経済循環を創出する「環境保全型なりわい」の実現に向けて新規プロジェクトを立ち上げることにしました。

プロジェクトを行うにあたりまずは、空洞化していく芦生集落に残る住民たちの「誇り」や「この地域に対する思い」を顕在化させ、集落全体として捉え直すことにより地域に息づく DNA を明らかにし、集落資源の掘り起こしを試みたのが本調査です。

この調査を通じ、自然学校としてはこれまで未着手だった地域住民や来訪者の思いや問題意識を定量的・定性的に把握できました。同時に、地域の方々との出会いや語りを通じ、事業化に向けた素地を耕しつつある手応えを感じています。

本報告書では、「芦生集落まるごと資源調査」として実施した 3 種類の調査結果を示すとともに、一連の調査を通じ明らかになったこと、今後の展望を記載しました。今回の調査で感じた手応えをそのままにせず、引き続き、住民のみなさんや来訪者のみなさんとの議論を行いながら、これからの芦生集落の未来を考え取り組んでいきたいです。

特定非営利活動法人 芦生自然学校
理事長 井栗 秀直

2. 調査の概要

目的	芦生地域を持続可能な環境保全型コミュニティとして維持していくために、集落内外の視点の違いから集落の魅力や生活実感を把握し、集落維持に必要な道筋と、解決すべき優先項目を明らかにする。		
調査名称	たずねる① 芦生来訪者意識調査	たずねる② 集落住民聞き取り調査	くらべる 同様他地域との比較調査
対象	集落来訪者	集落成人住民 46 人	同様他地域
方法	質問紙調査 集落内の配布協力施設 4 箇所での記入依頼を元に、来訪者が質問紙に任意で記入。	聞き取り調査 調査紙を元に 60 分のヒアリングと自由談義。 (座談会・質問紙を併用)	視察・受け入れ 視察先—3 地域 受け入れ—1 団体
期間	7 月 20 日～8 月 31 日	7 月～12 月	7 月～11 月
調査項目	美山町来訪回数／集落来訪回数／来訪頻度／主な来訪先／来訪目的／来訪満足度／満足度の点数理由／来訪促進に必要と考える要素／芦生集落応援方法・発揮可能なチカラ／属性	属性／芦生在住歴／現在の仕事／芦生での暮らしのプラス面／マイナス面／暮らしの中で得意な領域 (8 項目から 1 項目を選択の上、詳しく伺う)	視察先 ①岐阜県立森林文化アカデミー及び揖斐川町 ②滋賀県高島市 ③徳島県上勝町 受け入れ
調査状況	記入回答者 155 名 ↓ 調査結果送付 (送付希望者 42 名)	聞き取り 延べ 35 名 ※内訳は以下のとおり ・戸別訪問→14 名 ・結の会 ^{※1} →15 名 ・質問紙 ^{※2} →6 名	学生のフィールドワーク ^{※3} 受け入れ及び 京都大学研究林研究者を交えた座談会の実施
	住民向け報告会の実施 結の会 15 名 芦生区会 9 名参加		

※1 65 歳以上の集落住民の定期的な交流会のこと。

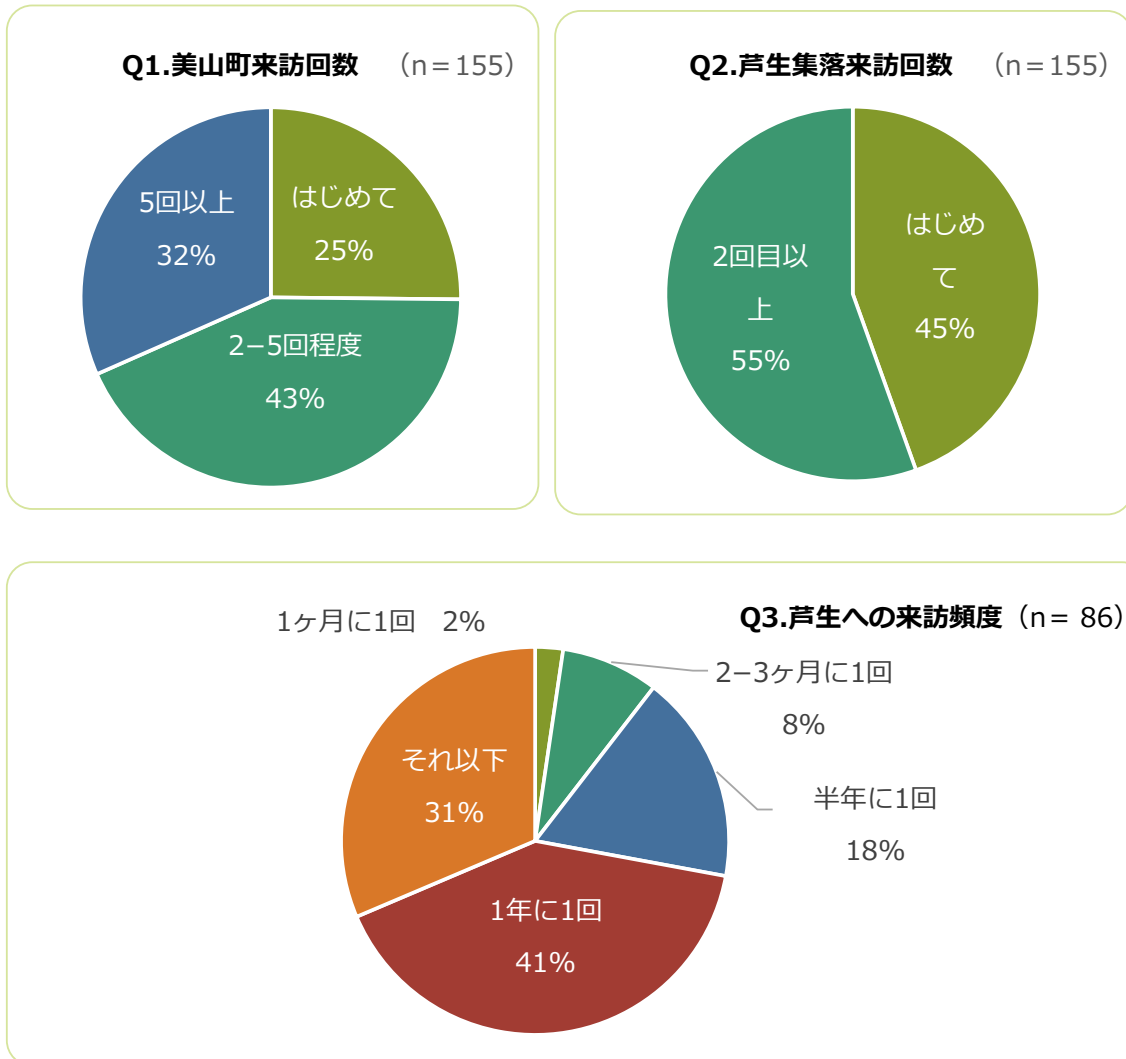
この会で本事業の進捗状況報告を兼ねた座談会を実施し、追加聞き取りを行った

※2 戸別訪問、結の会で都合のつかなかった集落住民 16 名に調査シートを直接配布した

※3 岐阜県立森林文化アカデミーの学生が授業の一環として来訪。

3. 調査結果

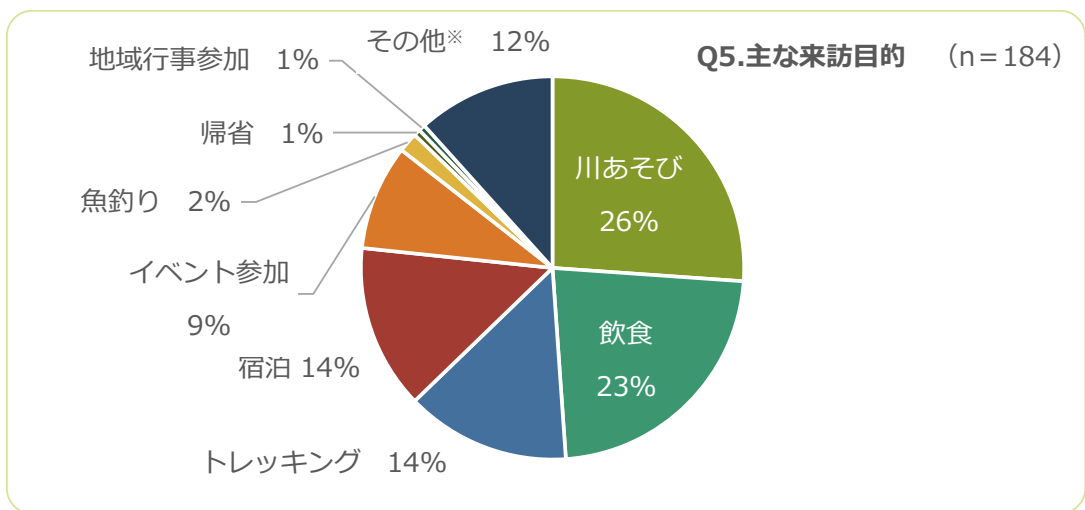
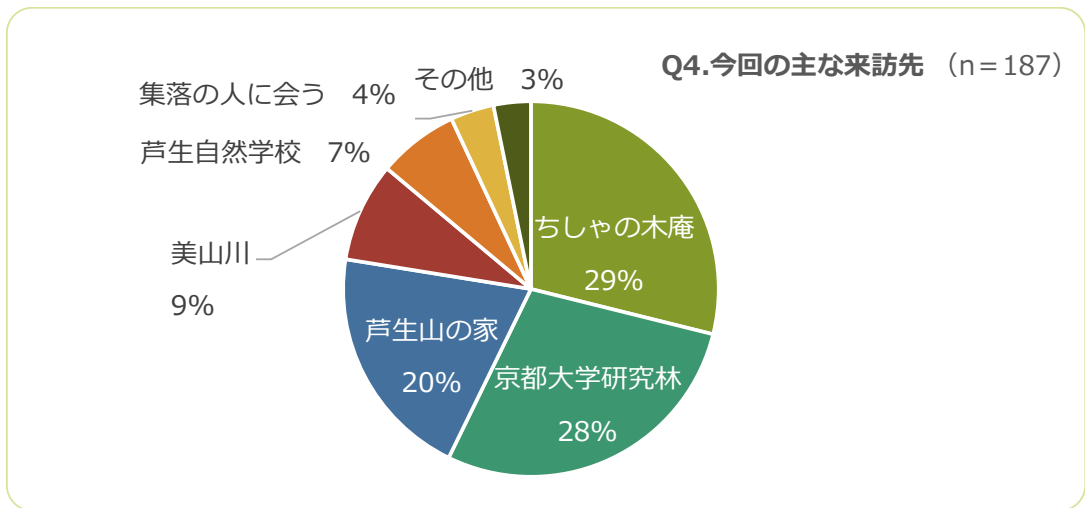
1. たずねる①芦生来訪者意識調査（質問紙） ※各質問の有効回答数 n= で表記



Q1 美山町への来訪回数は「2回—5回程度」が最も多く次いで「5回以上」となっている。

Q2 Q1で美山町への来訪回数を、「2回—5回程度」「5回以上」と回答した人のうち、芦生への来訪回数が「はじめて」と回答したのは26.7%である。

Q3 芦生来訪回数「2回目以上」と回答した人の来訪頻度を尋ねたところ、41%が「1年に1回程度」、31%が「それ以下」と回答し、複数回芦生に来訪している回答者の72%の来訪頻度はそれほど高くないことがわかった。

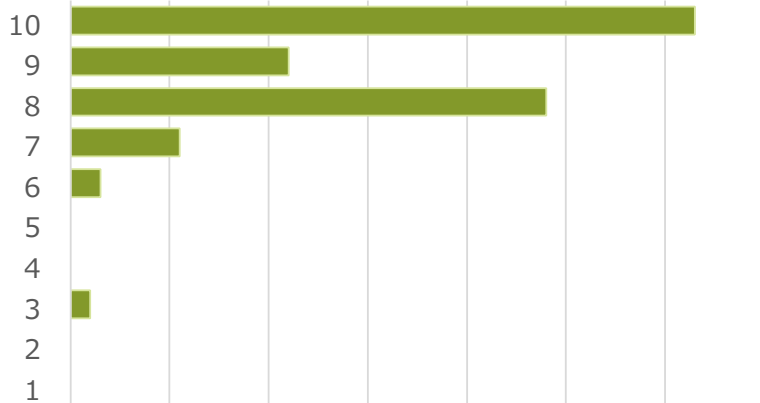


※その他の理由＝生物部の合宿（6） ツーリング（2） 原生林を見に（2） 原生林の近くでのんびりするため&癒しを求めて・ドライブ・・鮎つかみ・生き物の採集・自然観察等

Q4 美山町への来訪回数は「2回—5回程度」が最も多く次いで「5回以上」となっている。

Q5 Q1で美山町への来訪回数を「2回—5回程度」「5回以上」と回答した人のうち、芦生への来訪回数が「はじめて」と回答したのは26.7%である。

Q6. 今回の芦生来訪（滞在）の満足度（n=149）



10点	63人	42%
9点	22人	15%
8点	48人	32%
7点	11人	7%
6点	3人	2%
3点	2人	1%

Q6 来訪（滞在）満足度を 10（満足）～0（不満足）で評価してもらったところ、42%が「10」、15%が「9」、32%が「8」と回答し、満足度平均は「8.8」となった。なお、無回答者は6人あり、「今から行くのでわからない」「これから」との記述であった。

Q7. 満足度の点数理由／自由記述（n=122）

Q7 自由記述のデータを質的に分析したところ、点数ごとに特徴が見られた。

* 点数8・9・10 を選択した人は「空気がおいしい」「自然が豊か」などの表現が多々あり、満足度と自然環境との相関関係が高い。

（プラス評価）

自然が豊か・美しい・気持ちがいい（33）／食事がおいしい（15）／川がきれい・楽しい（13）／雰囲気が落ち着く・静か・のんびりできる（5）／ガイドの話が良い・アテンド安心（5）／生き物が多い・たくさん見ることができた・魚がとれた（7）／涼しい（4）／気持ちいい／風景に癒される／子どもが満足していた等

（マイナス評価）

天候不順で川で遊べなかった（5）／寒かった（2）／交通不便／道の最後が崩れていた等

* 点数7 の選択理由からは、プラス評価の「7」とマイナス評価の「7」が見られた

（プラス評価）

静かで落ち着く／川の音、風の音、鳥の声、静かな自然を満喫した／いろいろな生き物を見ることができた／川がキレイだった

(マイナス評価)

ちょっと遠い／先約が多く今年は1泊しかできなかった／来る時のバス故障で乗り換えなければならなかった／あてもなく歩いたのでちゃんと調べてくればよかった／例年よりトチの量が少なかった／もっと早い時間から山歩きを始めればよかった

* 点数6を選択した人は「産業と歴史が素敵」「帰省したがトチの実が例年より少なかった」

* 点数3を選択した人は「時間的なことで満足に至らなかった」「ホームページを含め資料の充実」と回答していた

Q8. 芦生来訪促進のために必要な要素・期待する事柄／自由記述 (n=93)

Q8 無回答の割合が高く、回答率は60%にとどまった。回答内容を分析した結果、最も多かったのは「芦生製品の充実・お土産の種類を増やす」であり、次いで「ネットでのPR・webの充実、都市部での周知活動」「今のままで十分・開発せずに今のままが良い」となり、芦生集落の魅力向上に付加価値を求める層と今のままが良いと感じる層に大別された。また、「自然の美しさ」「自然環境の維持」「自然を守る」など自然というキーワードを含めた表現が16件と多く見られ、自然豊かな芦生であり続けることが何よりの魅力だと捉えている人たちが最も多かった。

▼多かった意見

芦生の製品の充実・お土産の種類を増やす(10)

今のままで十分・開発せずに今のままが良い(9)

ネットでのPR・webの充実、都市部での周知活動等(9)

公共交通機関の整備(8) …アクセス・交通確保・土日の芦生行きバス・道路状況整備・道の改善等

食料品販売(8) …お食事処・喫茶・おにぎりやお茶が買えるところ・地域の野菜販売等

体験プログラム充実(7) …製品の生産・鹿の解体・狩猟・里山手入れ・手頃なトレッキングツアー等

宿泊施設の充実(6) …民泊・ゲストハウス・家族で泊まれるところ等

▼その他特徴的な意見

・ワサビの商品拡充

・変な商業的な店や企画はなしで、今のままを少しずつ宣伝していけたらいい

・芦生漬や美山の米などで定期購入できるものがあれば嬉しい

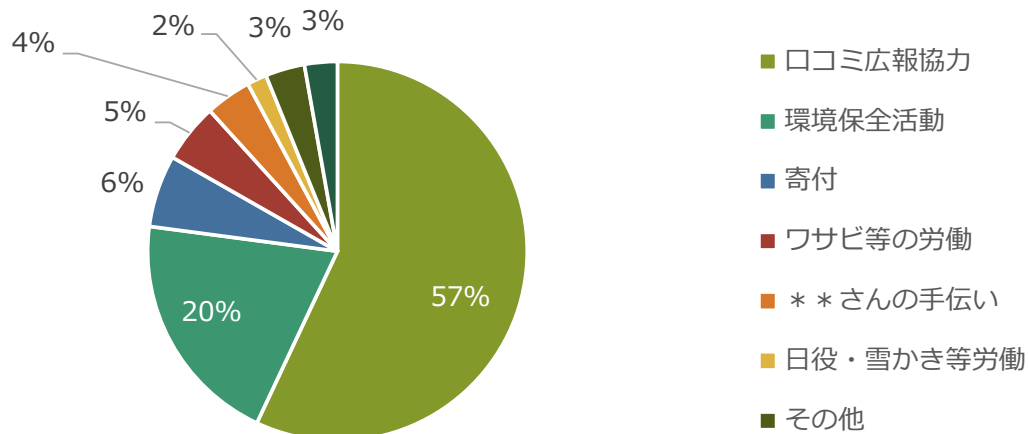
・都会からすぐ行ける大自然というイメージをもっと友達にアピールしていきたいです

・大自然をありのままに感じるのが最高

・自然が豊かなのは「芦生」じゃなくてもあるだろうから「ここ」だけの何かを具体的に

- ・ 芦生・南丹市の宣伝（源流地であること、他のところと違うということをもっと強く）
- ・ 「芦生のもの」と周囲の人に教えてあげられるような手段となるもの（お土産・特産品など）
- ・ 地元の人とのふれあい

**Q9.あなたが芦生ファンとして今後応援して下さると仮定した時、
どのような「チカラ」を発揮いただけますか？（複数回答 n=179）**



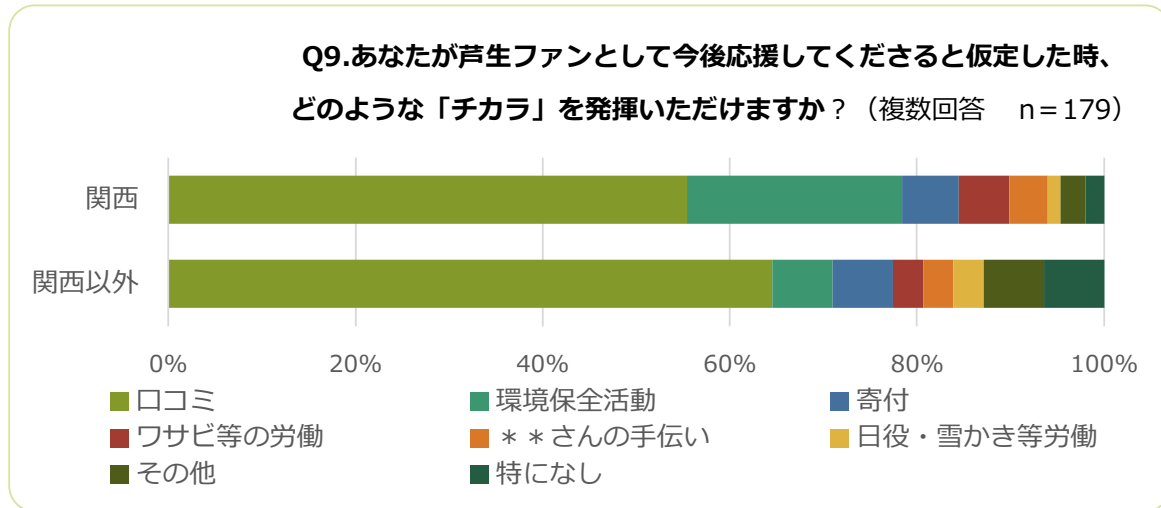
口コミで友人・知人等に芦生の魅力を伝えるなどの広報協力	102人	57%
美山川・京大研究林等での環境保全活動への参加	36人	20%
寄付	11人	6%
ワサビ・ウド等の生産に関する労働への参加	9人	5%
**さん（集落に住む特定の誰か）の手伝い・サポート	7人	4%
集落維持のための日役・雪かきなどの労働への参加	3人	2%
その他※	6人	3%
特になし	5人	3%

※NA=22

※その他の理由＝自分から何回も来る／（環境保全活動や生産に関する労働に）参加したいと思いますが体力的に？／応援したいですが今は想像ができません／年齢的にお手伝いは無理なので遊びに来ます／身内・友達と遊びに来る宿泊など／イベントへの参加等

Q9 圧倒的に広報協力の占める割合が高く、遠方者でも芦生を応援しやすい発信手段・広報媒体等の整備により潜在的なファン層を掘り起こせる可能性がある。一方で「環境保全活動への参加」と「生産に関する労働への参加」を合わせると29人となり、全体の2割以上いることから、これらの活動への参加方法を開拓する余地は十分にある。

また、居住地別に見てみると、関西以外に住んでいる人の65%が「口コミ」を選択したことに対し関西地域に住んでいる人の55%が「口コミ」23%が「環境保全活動」を選択していた。



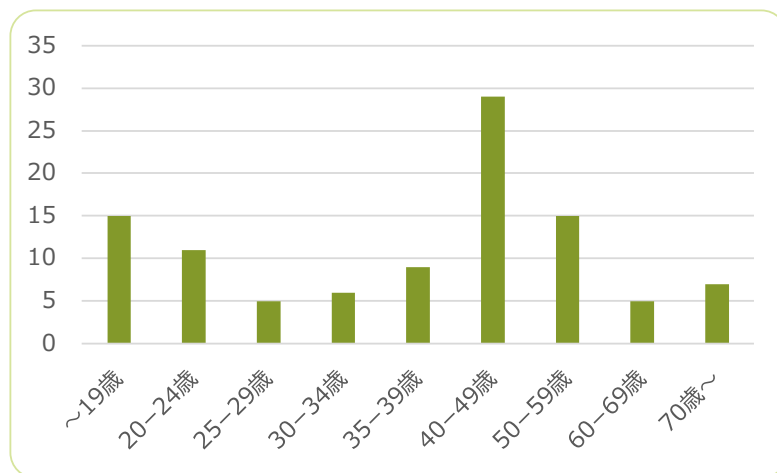
本調査回答者属性は以下の通り。

Q10 性別 (n=140)

男性	71人	51%
女性	69人	49%

Q11 年代 (n=139)

～19歳	18人	13%
20～24歳	15人	11%
25～29歳	7人	5%
30～34歳	10人	7%
35～39歳	13人	9%
40～49歳	40人	29%
50～59歳	20人	14%
60～69歳	8人	6%
70歳～	8人	6%



Q11 ~19歳の大半は「高校生の部活合宿利用」であり、次いで家族で山の家に宿泊した人たちである。40-49歳の割合が多いのは、芦生自然学校のイベント参加者層であったことに起因する。

Q12 お住まい (n=136)

大阪府	63人	46.3%
京都府	39人	28.7%
兵庫県	11人	8.1%
東京都	5人	3.7%
奈良県	4人	2.9%
愛知県・埼玉県	各3人	2%
愛媛県	2人	1.5%
福島県・千葉県・石川県・富山県・滋賀県・香川県	各1人	0.7%

NA=18

- ・京阪神の占める割合が約8割であり、美山町来訪者の居住地別割合と同じ傾向である
- ・大阪府の内訳は以下の通り
(大阪市14、島本町12、高槻市10、摂津市4、豊中市・交野市・箕面市—各3、枚方市・八尾市—各2、門真市・吹田市・高槻市・寝屋川市・和泉市・堺市・貝塚市—各1)
- ・京都府の内訳は以下の通り
(京都市20、南丹市5、亀岡市3、城陽市、向日市、長岡京市、乙訓郡山崎町・八幡市・和束町—各1)
- ・兵庫県の内訳は(猪名川町・川西市—各2・尼崎市・西宮市・伊丹市・神戸市—各1)で、大阪市・京都市が上位を占める点と比べると神戸市への認知度は低いことが見て取れる。

その他 「本調査結果及び今後の芦生での事業案内等の送付希望」として連絡先等を記入された方が42人と多く、調査及び集落事業への関心の高さが伺えた。

2. たずねる② 集落住民聞き取り調査（質問紙）

芦生集落住民ヒアリングシート	
ヒアリング日時	月 日 : ~ :
お話を伺った方	さん 男・女 () 歳
ヒアリング担当	川勝・青田・大滝・その他 ()
1) 芦生在住歴（暮らしの経緯・変遷）	
2) 現在のお仕事	
3) 暮らしのプラス面	
4) 暮らしのマイナス面（ギャップを感じる点・気がかりな点）	
5) 得意な領域（いずれかを選択いただき、詳しく伺う） 1.料理 2.山仕事 3.畑仕事 4.川・釣り 5.大工仕事 6.手仕事 7.自然の知識 8.その他	



（ヒアリング風景）

■聞き取り調査結果概要

調査対象となる芦生集落成人住民 46 名に対し、30 名からの聞き取りを行った。集落の過半数以上の住民と直接やりとりをし、それぞれの声を伺えたことは大きな財産となった。今後も引き続き、まだ話を伺えていない方への聞き取りを行う。ここでは、各項目での話題を取りまとめて記載する。

1) 芦生在住歴（暮らしの経緯・変遷）

京都大学演習林内に林道を切り開くためにダイナマイトを背負って日夜指揮をとった話、地域でなめこ生産組合を興すにあたってメンバー全員で試行錯誤した話、ダム建設の反対運動当時の抗争の様子などをお伺いする中で、集落としての歴史・思想観・コミュニティの結束等の特徴が浮き上がってきた。山からも川からも恩恵を受け自給率の高い地域であったこと、鯖街道に位置し人の往来が盛んであったこと、日本海に近く行商から良い品物を届けてもらえていることなど、最奥地の集落でありながら豊かな暮らしをしてきたことがわかった。

2) 現在のしごと

芦生山の家、芦生の里等、集落内事業者で働く人が大半であった。一方、結の会世代（65歳以上）からは、かつてのお仕事を伺う割合が高かった。現役世代の方のヒアリングでは、ご自身が仕事にどのような向き合い方をされているかを語ってくださる方が多くいた。一方で「もっと若い人が入ってきてくれたら」「みんな自分の身体を維持するだけでも精一杯」などの声や「役が多々あって忙しい。なかなか新しい試みをするエネルギーが生まれにくい」といった声も聞かれた。

3) 暮らしのプラス面

芦生の自然環境に対する豊かさ／暮らしの維持のために積み重ねてきた努力／培われた濃い人間関係／芦生に住み続けてきたことに対する誇り・覚悟等に関する表出が多く見られた。

4) 暮らしのマイナス面（ギャップ・気がかりな点）

交通の便が悪いことによる不便さ／医療・教育・仕事場の少なさ等を挙げられる方が多く、「自分の子どもたちや若い人に手放しでは勧められない」という本音も複数の方から聞かれた。一方で「若い方や子どもの活気に期待」「集落内の事業所が連携すれば突破口が開ける」との声や「うちの畑を使って」「地域経営組織の一体化を模索しては」等の提案もあった。

5) 生活の中での得意領域

質問の意図としては、1つを選択した上でその背景にある経験や知恵を深く伺いたいと考えていたが実際には「どれも大体やってきた」「このあたりはお父さんができて、私はこのあたりをやっていた」といった声が多く聞かれた。これは、一領域に長けるというよりも、いずれもの領域が暮らしの根幹であり、小さい頃から積み重ねられた経験値そのものであることが明らかになった。同時に「野草・薬草の勉強をしている」「本が好きで芦生に図書館があったらいいと思っている」「喜ばれるので、佃煮やジャムはよく作る」「花をいけるのも、お皿を選ぶのも遊び心」といったエピソードも聞かせてもらい、事業化の際は知恵を拝借できる心強い顔ぶれが増えた。

6) その他

座談会形式で進行した「結の会」では、男女問わず様々な話が行き交った。「料理」ではニシン漬け・ムカゴごはん・柴漬け・巻き餅などの話や柿の保存方法（焼酎漬け・塩漬け等）が、「山仕事」では杉起こしを女性も日役で行っていたこと、植林は川流しで材を運び出すために川の淵に行っていたこと、ただ植えればよいというわけではなく地ごしらえが肝心などの話が上がった。

■ 芦生集落向け報告会の実施

集落住民向けに、くらべる①（来訪者質問紙調査）及びくらべる②（住民聞き取り調査）の結果報告の機会を2回持った。出席された住民は熱心に耳を傾け、調査結果に反応してくださった。くらべる①の結果に対しては「満足度がそんなに高いと思っていなかった」「やっぱり芦生の自然は大きいな」といった声が聞かれた。また、満足度の低かった方の理由が“ホームページの充実”であったことを紹介したところ「集落としての発信を考えていかないとあかん」との意見も出された。

質疑応答を含めた自由討議の時間では、「（芦生）自然学校が集落に対してこういう場を設けたいと言ってくれたことが嬉しい」「自然学校といえば子どもの活動をしているイメージなので、集落の調査とは想像していなかった」「芦生の問題は芦生に住む一人一人が力を出して考えることだし、自分も力を出したい」「まずはこの地域**だったらいいな…という夢を語る場を持とう」「以前は喫茶店もあったし、もっと寄り合いの機会が多くあったが最近寂しい。若い人のがんばりだけでなく、住んでいる者もお互いの元気を作れるように一肌脱ぎたい」「今後も集落のみなさんに、取り組んでいることを発信してほしい」「みんなが少しずつ、がんばろうって気持ちになれる機会を持ちたい」など、当事者意識を持ったそれぞれの思いや問題意識を聞きあう時間を持てた。

日時	10月30日 13:30～15:00	12月15日 20:30～21:30
場所	芦生地区公民館	
出席者	集落住民：15名 自然学校スタッフ：3名	集落住民：9名 自然学校スタッフ：4名



3. くらべる（同様他地域との比較調査）

自然と共にある暮らしのあり様そのものを学び・体験し・発信する仕組みとして、成功している類似サイズの準限界集落への視察を行った。視察にあたっては、今回アドバイザーをお願いしている、過疎地域の自律的振興（住民参加のまちづくり）、文化資源マネジメント（文化的景観の保全活用）が専門領域である岐阜県立森林文化アカデミー教授の嵯峨創平さんにも加わっていただいた。

1. 岐阜県立森林文化アカデミー及び揖斐川町視察（7月）

嵯峨さんのレクチャー及び活動フィールドを訪れ、芦生での事業の方向性を探った。

<主な訪問先>

・柿 ZANMAI（資源の活用と地域のつなぎ直しの視点）

岐阜県山県市の旧伊自良でかつて特産であった柿渋を 50 年ぶりに復活し、天然塗料・染料として新たな商品開発を目指す拠点施設。横浜から移住して染色に取り組む SK 氏、愛知県から移住して Web 情報発信を担当する KK 氏の 2 人の地域おこし協力隊員が常駐。若い隊員を受け入れたのは伊自良の渋柿生産者組織の農家 10 名でこの活動母体との連携が柿 ZAN MAI 成功の秘訣だとわかった。

・狩猟採集文化研究所（民学共同での事業化の視点）

岐阜県森林環境税を財源に岐阜大学に設置された野生動物管理学研究センターのサテライト施設。揖斐川町谷汲でジビエレストランや食肉処理場の開設を計画していた民間事業者の経営者が古民家を斡旋して開所した。岐阜大学の教員 2 名が常駐しており、男性の M 氏は動物学の知見から野生動物の行動特性と狩猟技術の講習実習を提供されていた。女性の Y 氏は文化人類学の視点から日本人の肉食文化に対する誤解の修正や動物と人間の共生に関する指導を行っていた。大学の技術指導と民間事業者の投資により、ジビエレストランと食肉処理場が活発に稼働していた。

・岐阜県立森林文化アカデミー（森林の活用の視点）

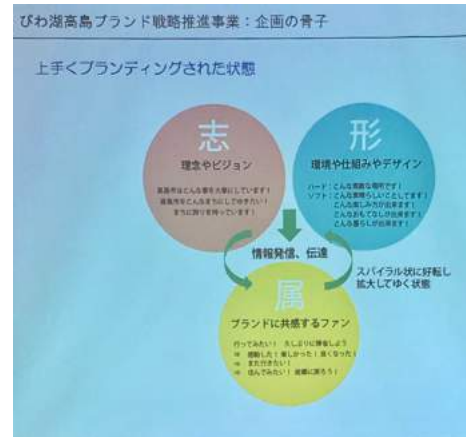
2001 年に開学した林業・森林環境教育・木工・木造建築の 4 分野をカバーする森と木に関する仕事を学ぶ 2 年生の専門学校。嵯峨教授は揖斐川町と森林文化アカデミーの連携協定に基づき駐在員として揖斐川町に常駐されていた。他にも県内の複数自治体と連携協定を結んで協働事業や人材育成に積極的に取り組まれている。今回は特に、里山の雑木林に自生する多種類の広葉樹を「グリーンウッドワーク



（生木木工）」という手法で活用する技術と拠点施設を視察した。乾燥工程が不要で簡易な手工具によりカトラリー等が製作できる生木木工は、新たな地場産業となる可能性と森の恵みを実感できる環境教育としての効果も大きい。

2. 滋賀県高島市への視察（9月）

滋賀県高島市の新たな地域ブランド創出事業の一環として始まった「サトパス Sato-Path」の現場を視察した。同事業は2人の仕掛け人の出会いから生まれた。地元出身でプロの山岳ガイドとして長年活動をしてきた前川正彦氏は、琵琶湖周辺の低山や農村空間で「自然ガイド」の活動や人材育成を展開する構想を持っていた。一方の平井俊旭氏は、美大を卒業後に「スープストック東京」の店舗設計を担当する中で、日本各地の地域材を取り入れた店舗木質化を成功させた。その後、地方の食文化やクラフトの可能性に着目して高島市に移住して



雨上株式会社を設立。「高島の食と人～3つの〇〇～」のウェブサイト運営などを通して地域資源のプロデュースを開始している。2人の思いが合致して、里山のフットパスを徒歩または自転車で案内しながら「自然ガイド」を行い、移住者の農場、カフェ、クラフト工房にも立ち寄ってお金を落としてもらう。こうした仕組みを運営する「自然ガイド」をそれらの事業者から選抜してガイド技術の講習も行われている。

3. 徳島県上勝町への視察（10月）

葉っぱビジネスで有名な上勝町。ゴミゼロによる地域づくりや地ビール・農産物の加工品、また移住定住による働き手の確保などを地域ののみならず地域外の組織や個人と連携しながら行っている中山間地域での取り組み事例を伺った。

<主な訪問先>

- ・RISE & WIN Brewing Co.（廃材×資源×定住者の視点）
- ・上勝ゼロ・ウェイストアカデミー（廃材・廃棄物からの事業化の視点）



4. 岐阜県立森林文化アカデミー学生の受け入れ（11月）

「森林空間利用プログラムと事業化」の授業の一環として、芦生でのフィールドワーク受け入れ及び本プロジェクトをはじめとした芦生自然学校の取り組みを紹介し、京都大学芦生研究林の常駐研究者を交えた座談会を実施した。



明治初期から始まる芦生演習林（後に研究林）の経緯と活動内容を研究者から伺った。当初は林業の素材生産実習地として伐採、搬出、製材、育林、新たな有用樹種の導入試験、特用林産物の生産などが活発に行われていた。

一方で京都大学の研究者が長期間にわたり森林生態、動物生態などの研究データを蓄積してきたため、芦生の森は日本有数の「原生林」として保護すべき対象としての価値が高まり、登山やガイドツアーの人気が高まった。ただ近年は芦生の森にもナラ枯れ、マツ枯れの病虫害被害が広まり、巨樹巨木が減ったとの指摘もある。またニホンジカの食害により下層植生が無くなったため、森林生態系が貧弱化し、その回復は困難との指摘もある。芦生の森の生物多様性の保全は大きな課題を抱えている。

人が入って使いながら守られてきた「芦生の森」の保全を考えることは、芦生集落の生活・生業を守ることと表裏の関係にあることを、学生たちが学び取っていた。

4. 調査から見えたこと

1. たずねる①及び②を通じて

来訪者満足度の高さは、芦生の自然が持つ非日常感

来訪者意識調査からは、予想以上に来訪者の満足度が高いこと、その背景には豊かな自然・非日常感が期待以上であることがわかった。同時に、年代を問わず「癒された」「リフレッシュできた」「元気になる」などの表現が多々あり、リトリート（休息）空間としての魅力が高く、そうした空間を「今のままで十分」と捉えていることも明らかになった。

集落・地域応援の具体的な仕組み化がコアなファン（活動型来訪者）を醸成

集落応援を「口コミ等の広報」でと回答した割合が57%と最も高く、「寄付」と回答した割合も6%あった。「環境保全・集落日役・生産活動」等の労働提供を通じた集落応援を希望する割合が30.7%あり、その92.7%が日帰り圏内の関西圏在住者など、地域を応援したい来訪者の思いを具体化させるための手立ての提示ができれば、芦生との関係の濃いコアファンへと変容する可能性を秘めていることが見えた。

単なる来訪者増は望んでいない集落住民の誇りと覚悟

集落住民の聞き取り調査では、集落維持そのものが困難になりつつあることや圧倒的な担い手不足が浮き彫りとなった。新しい人が入ってきてほしいと願う一方で、下流域（かやぶきの里）で、観光者増により集落住民としては暮らしにくくなっている現状があるだけに、集落を具体的に支援・応援してくれる来訪者・滞在者・移住者を望んでいることも確認できた。

集落としての基盤整備が多様な担い手を招き入れる

「自然学校が単体で試行錯誤するフェーズではなく集落課題として捉えるべき」「集落内の事業者が連携し、それぞれの資源を持ち寄ることで攻めの集落維持を模索できないか」といった地域内の組織基盤強化を希望する考えも強く、集落内事業者連携・基盤整備を進めることが、結果として地域が多様な担い手を受け入れる素地につながるという道筋が見えた。

要素分類でなく暮らし手の存在を紐解く調査スタイルの効用

聞き取り調査は一人一人の生き様に触れる作業であり、この土地に根ざした「暮らし手」の物語を垣間見る時間だった。自然資源の豊かな地域として語られる芦生の文化的資源を掘り起こしたいと考えて取り組んだ本調査だが、「資源」は暮らしから切り離して語ることはできず、一人一人の暮らしと共にあってこそその「資源」であることを再認識した。

同時に、全住民ヒアリングを試みることは

- ① 芦生自然学校の取組への理解や関心を持っていただく機会
- ② 地域の方々との関係性を構築する機会
- ③ 地域を多面的に理解できる機会

という3点において、一見遠回りのようであるが極めて重要だとわかった。

2.くらべる を通じて

「土の人」と「風の人」が両輪となって地域が動き始める

訪問したそれぞれの地域が、手探りでの事業展開を図りながら、地域資源から新しい価値創造による地域づくりを行っていた。地域特性や規模、これまでの経過などにより実現される形は違えども、地域住民（土の人）と外からの人（風の人）、さらに、企業・行政が上手く交わりながら、視点の違い、価値観の違いを受け入れて、前へ進むとする姿勢が大切であると認識した。

集落の持つ表層化していない背景や歴史、価値と出会うには「人」がカギ

芦生を来訪した学生が発した「芦生は原生林だとイメージしていたし、希少な植生に関心があったが、ガイドさんの案内によって、かつて人が暮らしていた場所であることが想像でき、森の見え方が大きく変わった」との言葉からは、私たちが発しているメッセージと受け取る相手との間には大きなギャップがあり、そのギャップを埋めるには、人（ガイドをはじめとしたつなぎ手）の存在が重要であるとわかった。

集落の生態系を多様化させる

人材の多様性が地域の深みをつくること、そして人が介在することによってこそ、地域の深みと多様性を享受できることを強く感じた。多様な生物が棲息する森が豊かであることと同じく、集落もまた、多様な人を受け入れ巻き込みながら芦生ならではの生態系を育みたい。

3.アドバイザーからのコメント

芦生自然学校の井栗理事長は、生粋の地元民として住民の心情に通じ、芦生集落が森林資源を活用しながら生きてきた歴史に精通していると同時に、外部から新しい人材や技術を積極的に取り入れることがこれからの芦生集落の存続のために必要だと考える開明的なリーダーです。そのことが芦生自然学校の若いスタッフが活躍する環境を提供していると考えられます。この自然学校の運営スタイルをさらに広い社会的な仕組みへと発展させていくことが地域経営のカギだと考えられます。

幸いにも「芦生の原生林」は都会人が憧れる高いブランドイメージを持っています。しかし実際には移動距離や受入れ施設の関係で訪れる人を選ぶバリアも持っています。これを逆手にとって、本当に自然の美しさや日本文化の伝統を愛する人たち（関係人口）を選択的招き入れながら、日本全国や海外にも広く発信するような事業構築ができる可能性があると思われます。そうした実例はすでに島根県海士町や徳島県神山町などに見られ、芦生集落においても事業化の参考になる技術や活動形態は、一連の「くらべる」調査の中に散見されます。今後は芦生集落の皆さんとじっくりと材料を温め、京都大学の専門知や人脈の助けも借りながら、地域の特性に適った事業と組織を具体化していくことを期待します。

岐阜県立森林文化アカデミー教授 嵯峨 創平

4.担当スタッフの感想

この資源調査を通し、私は芦生という集落を、調査員として外からの目線と、住民として内側からの目線で、長期に渡って観察する事が出来ました。

聞き取り調査を続けるにつれ分かってきたことは、芦生という場所が昔ながらの日本の生活の残る山村地域であるというだけでなく、行き止まりという地理的条件により「なんでも自分で解決しなければ」という意識が深く根付く場所であるということです。生活の中での得意領域を尋ねる質問では、夫婦で分担し自分の家の中で生活に必要な領域を満遍なくカバーし、山の産業が危うくなった際には自分たちで生業を作り出し、生活を脅かすダム建設にも団結して反対する等、集落全体でも自己解決意識が高かったことがわかってきました。個人的な見解では「芦生の芦生らしい面白さ」は、この地理的条件に付随した「ここで完結する生活」という部分だと感じています。行き止まりであるからこそ生まれた文化、徹底した自足自給の技は、自分の生活が他に依拠していることに危機感を覚え始めている若い世代に響くと考えています。

住民目線と言えば、日々の会話の中で、芦生の人々がこぼす「寂しさ」が目につきました。「以前はもっと活気があった」「みんなでこんなことをしていた」「もっと交流があった」、でも今は無い寂しさ。よく聞いてみると浮かび上がってきたのは、老いによって昔やっていたことができなくて寂しい高齢者と芦生の伝統をもっと知りたいと思っている嫁世代。もっと関わり合うべきだ、関わり合いたいとお互いに思っている若い世代。住民からの情報を研究に取り入れたい京大研究林と昔の研究林との交流を懐かしむ住民。住民と関わりを持ちたい観光客と話相手が欲しい高齢者。聞けば聞くほどお互いに「もっと交流したい」と思っているのに、複雑な人間関係やきっかけの不足から出来ていないという現状を、とてももったいなく感じました。そしてこの交流不足を解消し、「寂しさ」を和らげることが集落の活気に繋がり、芦生の行き止まり文化をより濃く受け継ぐことに繋がるのではないかという考えに至りました。交流の機会を誰かが提供してくれれば、当日の連絡でも大部分が集まり楽しく交流し、台風の際には即座に団結して生き生きと復旧に臨むなど、芦生はまだまだ芦生らしさを残しており、多くの可能性と底力を秘めています。

こうしたきっかけづくりが本事業を支える柱の一つになると捉え、人と人との結び直しを含めた事業展開をしていこうと考えています。

芦生自然学校（聞き取り調査担当） 川緒 優

5. 今後の展望

一連の調査をふまえ、来訪者の意識、住民の芦生という地域に対する誇りや思いなどが見えてきた。また、芦生地域を持続可能な環境保全型コミュニティとして維持していくために必要な担い手の不足、住民同士また住民と来訪者の地域の捉え方にギャップがあることも明らかになってきた。とりわけ、地域の新たな担い手＝Iターン・Uターンによる移住・定住者という捉え方に限られていたのが、本調査を通じ“住まう”以外の選択肢を含め担い手になりうると認識した。またこの認識を地域住民も受け入れ、面白がりつつあることも、一連の調査プロセスによる変化である。

そこで、この点に留意しながら、芦生集落の内外の人たちとともに持続可能な集落維持を目指したい。

①地域内の事業者連携・地域組織の基盤整備

これまで地理的な条件から住民自身でコミュニティ維持をおこなってきた地域であるが、社会環境の変化、過疎化・高齢化により集落内雇用が減少し、担い手不足を引き起こし自治力が失われている。そこで、地域内の事業者・地域組織の連携を図り、地域経営力の向上と、住民同士、住民と来訪者のための受け皿となる仕組みづくりを行い、かつての住民自身でおこなっていた地域経営組織の再構築を行う。

②関係人口が交流するための拠点・場づくり

多様な人材が実際に行き交い、住民同士、住民と来訪者との交流のできる拠点や宿泊拠点を整備する。

③関係人口増に向けた事業の実施

集落に関心を持ち具体的に支援・応援する様な人材を増やすために、交流拠点を中心したつながりをもった人達から、芦生集落に足を運ばない方々に向けた情報発信を行い新たな担い手（関係人口）の充実にもつなぐ。

編集後記

今回の調査での成果は多くありますが、とりわけ「たずねる②」として、住民の方一人ひとりに対して約1時間以上におよぶヒアリングをさせてもらったことが、事務局としては、一番の成果であると考えています。ヒアリングで語られた住民たちの話は、芦生の地域特性や風土、誇り、また集落での共有知を明らかにしてくれました。そのことが、今後の事業の柱になっていくと確信しました。本来であればこの膨大なヒアリング内容についても、報告書へ掲載すべきところですが、語られた内容一つ一つが私的な部分も多く、概略的な内容でしかご紹介出来ない点は、ご了承いただければ幸いです。

この調査結果を受けて、今回お話を聞かせていただいた住民や、芦生によく来られる方、また芦生のことが気になりつつも来ることが出来ない多くの方々と一緒になって、私たちは課題解決に向けて様々なアプローチを試行錯誤していきます。一朝一夕に解決できる程、簡単なものではないですが、芦生とともに生きる自然学校として集落の一端を担い、考え、集落と共に行動し続けながら、芦生集落のDNAと誇りを次の世代に引き継いでいきたいです。

最後になりましたが、この調査に携わって頂いた多くの皆様に心からの感謝をお伝えするとともに、厚く御礼を申し上げます。

特定非営利活動法人芦生自然学校 事務局

発 行：2018年1月

企 画・編 集：特定非営利活動法人 芦生自然学校

問い合わせ先：office@ashiu.org